

愚者と沈黙 —— マセイスの《愚者》をめぐって ——

保井 亜弓

はじめに

ルーヴァンに生まれアントウエルペンで活躍したクエンティン・マセイ（一四六六—一五三〇）は、ヒエロニムス・ボスなどと並んで、その作品にグロテスクな人物像を描き込んだことで知られる。レオナルドの作品を発想の源とする、これらのグロテスクな人物は、とくに世俗的な主題の作品において風刺的な道德教化の役割を演じている。⁽¹⁾

その点で、マセイスの晩年作《愚者（愚行の寓意）》は、とりわけ暗示に富む作品である。ここでは、年老いた醜い愚者が、典型的な愚者のアトリビュートを備えて描かれている。しかし画中には沈黙の銘があり、愚者は指を置いて唇を結ぶという、愚者らしからぬ仕種を示しながら、冷やかな笑いをうかべ観者に視線を投げる。

単なる愚行の具現者ではなく、その風刺を観者に照射して内なる愚を暴く「賢く愚者」(wise fool)は、人文主義者エラスムスの『痴愚神礼讃』（初版一五一二）で示された愚者の姿である。マセイスは、ピーテル・ヒリスと対になったエラスムスの肖像を描いており、この偉大な人文主義者から多大な影響を受けたことはよく知られている。

そもそも愚者と沈黙という組み合わせ、それ自体が矛盾を孕み風刺的であると言えよう。マセイスの《愚者》は、ルネサンスの人文主義的な沈黙の図像のパロディであるようにも見える。しかし、はたして同時代的な思想のみがマセイスの《愚者》を成立させたのだろうか。エラスムス以前に流布していた悪徳としての愚者のイメージも、この作品と意味的、形態的なつながりを持っているのではないだろうか。本稿は、マセイスの《愚

者》とその先例を、沈黙の図像を参照しつつ、愚者とそれに対置されるものとの関係の中で考察する試みである。⁽²⁾

一、マセイスの《愚者》

マセイスの一五二〇年代半ばの作とされる《愚者》は、オリヴグリーン一色で塗られた背景に、膝上の半身像で描かれた愚者をあらわす（図1）。左手には、マロットとも呼ばれる愚者の棒を持ち、右手の人指し指を唇に置く。愚者の傍ら、画面左に、赤色で「口を閉じよ（沈黙を守れ）」(Mondeken toe)の銘がある。⁽⁴⁾

愚者は、宮廷道化のタイプではなく、頭巾の付いた袖無しの上着を纏った、年老いた僂僕としてあらわされている。この愚者は、次に示すような数々の典型的な愚者のアトリビュートを備えている。⁽⁵⁾

左手のマロットは、愚者が社会を嘲笑する特権を持つことの象徴である。その先端には、よく見られるような愚者の頭部ではなく、腕のない道化服の愚者が膝上からあらわされ、ズボンを擦り下ろして剥き出しにした尻を見せながら、笑いを浮かべた表情でこちらを振り返っている。狂気としての裸体や猥雑な尻の露出は、愚者の特権である無礼御免(Narrenfreiheit)をあらわしている。

ベルトと衣装の裾の鈴は、中世の愚者の衣装にすでにみられ、起源は定かではないが、古代の悪魔的な踊りの衣装にまで溯ると言われる。そして頭巾には雄鶏とロバの耳が加えられている。頭巾飾りとしての雄鶏は、鶏冠の頭飾りがよく知られているが、ここでは雄鶏の首となっている。ロバ

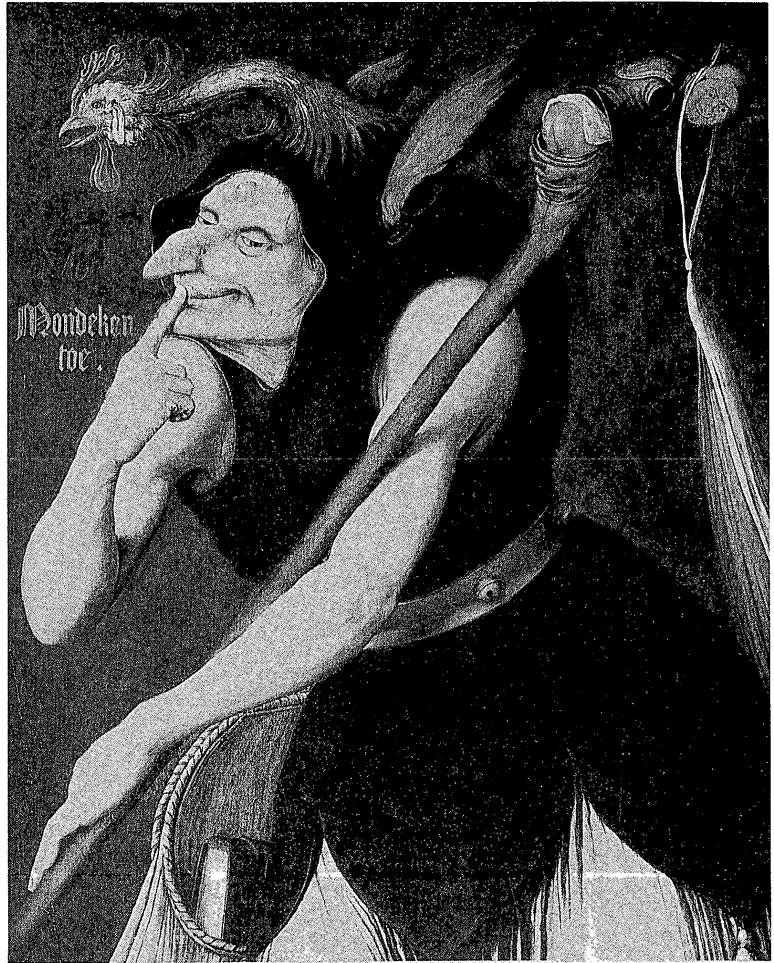


図1 マセイス《愚者》板絵 1520年代中頃 ニューヨーク ヘルド・コレクション

ラド美術館)など、中世末期にはよく知られ絵画に描かれた。

以上のように《愚者》には、愚者が正に典型的な特徴とともにあらわされている。しかし、銘文で明示されている、この絵の中心をなす表現、すなわち唇に指を置く沈黙の仕種は、賢者にこそ相応しいものであり、本来愚者とは相いれない。とはいえ、一見矛盾するかにみえるこの表現も、すでに研究者によって指摘されてきたように、沈黙を勧める銘文とその仕種とは逆に、この絵は「愚者は沈黙できない」というトボスをあらわすということと理解できる。⁽⁸⁾ 頭上の雄鶏は、戯れ言の如き鳴き声を立て愚者の本性を暴いている。

ラリー・シルヴァーは「マセイスのグロテスクなイメージは、観者を笑い返し、その道徳的立場に疑問を投げかける」と述べ、エラスムスの痴愚女神(moria)が語る愚者の役割との類似を指摘している。さらに愚者が、ベルトにさげている鞆に書物を持っていることについて、「エラスムスの学問的探求と人文主義者仲間に対する皮肉を加味する視覚的細部」であると述べている。⁽⁹⁾

愚たることを知る者こそが賢者であるとするソクラテスや、「神の愚かさは人よりも賢い」(『コリント人への第一の手紙』一・

二五)とする聖パウロ、そして「無知の知」というパラドクシカルな観念の哲学的基礎を築いたニコラウス・クザーヌスを経て、エラスムスは『痴愚神礼讃』において最も「賢い愚者」を登場させた。⁽¹⁰⁾ この思想においては、愚者の知恵は、学者の知恵と対照をなす。《愚者》の風刺的メッセージの特質は、書物について指摘されたのと同様に、その沈黙の仕種が学者を暗示することにあるように思われる。

二、学者の沈黙

マセイスの《愚者》よりも年代はかなり下がるが、ネーデルラントの版画家ヤン・ミュラーによる一五九三年の年記のある版画では、枠下に「哲

の耳は、通例のような頭巾飾りではなく、ここでは頭巾の穴から突き出ている。すなわち愚者は、ミダス王のごとくロバの耳をもっているのである。ロバは、古代、中世において愚鈍、怠惰、好色を象徴した。さらにルネサンスの愚者文学においては、アポロンによって耳をロバのそれに変えられたミダス王が好んで引用された。⁽⁶⁾

鷲鼻の愚者のグロテスクな容姿を強調するのは、額の中央にある大きないぼである。いぼやあざは、邪悪なものと聖なるものの徴として用いられるが、⁽⁷⁾ ここでは明らかに「愚者のあざ」(Narrenmal)をあらわしている。

愚かさの病の原因が頭の中の愚者の石にあるとするのは、古代以来の伝承であり、ヒエロニムス・ボスによる《愚者の石の切除》(マドリッド、プ



図2 ヤン・ミュラー《哲学者ハルポクラテス、沈黙の神》
銅版画 1593年

学者ハルポクラテス、沈黙の神 (Harpocrates Philosophus, Silentii Deus) の表題を伴った、唇に指を置く沈黙の神ハルポクラテスの胸像が描かれている。枠上には「指で唇を制せよ (沈黙を守れ)」(Digito com-pese labellum) と「沈黙を知らぬ者は話すことに無知とならん」(Loqui ignorabit qui tacere nesciet) の銘文がみえる (図2)。第一の銘文は、古代ローマの風刺詩人ユウェナリスの詩句である。マセイスの画中の銘文 “Mondeken toe” は、この詩句のオランダ語訳として、後のヤン・ダフィット神父の『キリスト教格言集』(一六〇三) に収められている。¹²⁾

ミュラーの版画の図像は、その源を、一五三一年に初版が出された後膨大な版が重ねられ、一六、七世紀の寓意図像集の流行の発端となった、アンドレア・アルチャーティの『エンブレマータ』の「沈黙について」(Silentium) に溯ることができる。エピグラムには、「愚か者は、沈黙すれば賢者と変わらぬ／その舌と声が悪かしさの徴である／それゆえ彼は唇を

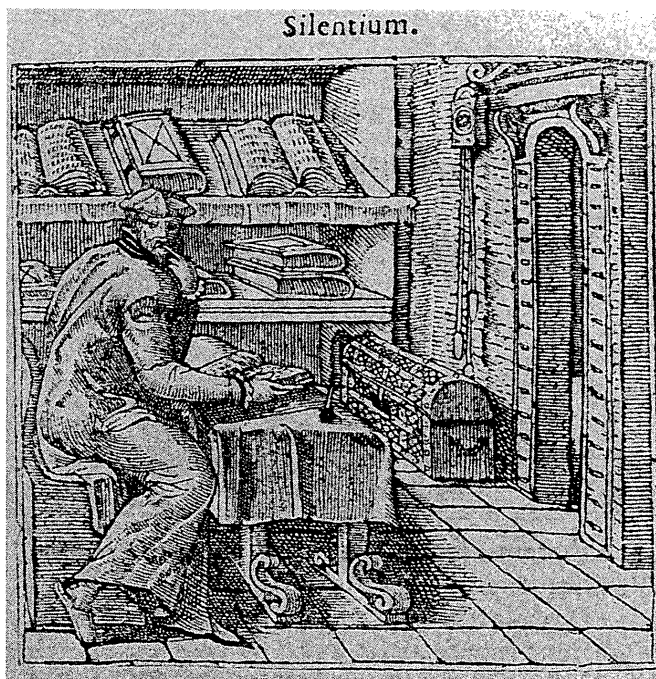


図3 ピエール・エスクリッシュ《沈黙について》銅版画
アルチャーティ『エンブレマータ』ルーエ・ボノム版より 1556年

結び、指で沈黙の合図を示すがよい／彼をエジプトのハルポクラテスとするがよい」とあり、¹³⁾ 画像は、書斎の学者が指を唇に置くところを示す。筆者の知るかぎりこれまで特に指摘されていないが、ミュラーによるハルポクラテスのイメージは、ピエール・エスクリッシュが描いた挿図に直接もついていると思われる (図3)。両者の振り返るポーズと唇に置く左手の類似性は、一六世紀までの『エンブレマータ』の他の版の挿図には全く認められない。¹⁴⁾

ミュラーが描き、アルチャーティのエピグラムに記されていたハルポクラテスとは、「幼児ホルス」を意味する名で、古代エジプト神イシスとオシリスの息子であるホルスのことをさす。その像は指をしゃぶる姿であらわされるのが常であったが、本来は子供らしさを示すこの仕種が、おそろくヘレニズム時代のアレクサンドリアにおいてギリシア人に誤解され、沈黙の神とされた (図4)。沈黙を勧めるアルチャーティのエピグラムの第

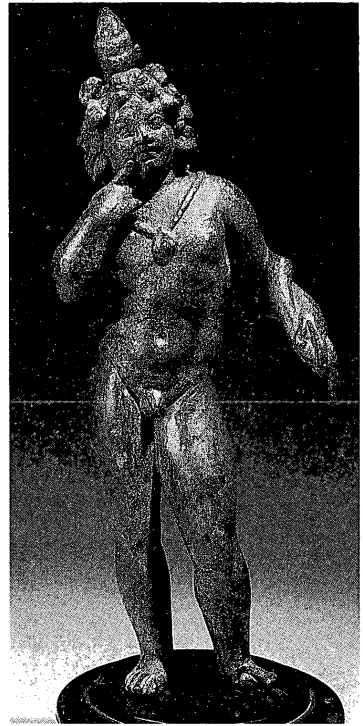


図4 《ハルボクラテス》アレクサンドリア(?)伝シリア出土
2世紀頃 古代オリエント博物館

三行は、ハルボクラテスにかんするオウイディウスやカトウルスによる記述にもとづいている。これらの古代のテクストは、すでにポリツィアーノやエラスムスなどルネサンスの人文主義者によく知られていた。

ルネサンスの人文主義者の哲学の中において、沈黙は「憂鬱質の人」(homo melancholicus)と結びつくと考えられた。カルラ・ランヘダイクは、思索や瞑想にかかわる中世の哲学者、学者、福音書記者、僧侶の像に、その先例となる画像を求めている¹⁰⁶。そうした思想とルネサンスの神話学者による古代神への関心の中で、学者と沈黙の神ハルボクラテスを結合する、アルチャーティの沈黙の画像が成立したのである。

「ハルボクラテスの徴」(Signum harpocraticum)と学者を結びつけたのは、アルチャーティが初めてであるにせよ、マセイスの《愚者》はそれを先取りしたパロデイのように見える。シルヴァーは、《愚者》の銘文と『エンブレマータ』のエピグラムとの共通性を指摘している¹⁰⁷。また、一六世紀の数多の『エンブレマータ』註解者の中でも、ひととき有名なクロード・ミニョーは、このエピグラムについて、『箴言』の「愚かな者も黙っているときは、知恵ある者と思われ、そのくちびるを閉じている時は、さととき者と思われる」(一七・二八)をすでに引用している¹⁰⁸。このように、沈黙が賢者と結びつけられるとき、愚者が引き合いに出される言い回しは、古くからの慣用であった。マセイスの愚者のにやにや笑いは、アル

チャーティを反映するミュラーのハルボクラテスの、憂いに沈んだ生真面目な洗面と対照をなしている。

アンドレ・シヤステルは、「ハルボクラテスの徴」が元来宗教的動機を伴う呪術的「徴」である点に着目して、沈黙の画像を再考した¹⁰⁹。マセイスの愚者の仕種もまた、ある種の呪術的力を放っているといえないだろうか。この点については、ウィリアム・ウィルフォードの《愚者》にかんする解釈が想起される。すなわち、鳴き声を立てる雄鶏と沈黙させられる愚者は、古来より愚者に結び付けられてきた、物憑きの状態の理解不能な異言(Cassolalia)と、表現不能な言語としての沈黙であり、愚行の魔術的次元をあらわしているという¹¹⁰。沈黙のこうした性質を考えると、《愚者》は、ルネサンスにおいて「ハルボクラテスの徴」を受け継いだいま一人の古代神、雄弁の神ヘルメスとも対照をなすように思われる。むしろヘルメスが沈黙において伝えるのは、深遠なる英知に満ちた秘儀であるのに対し、愚者の場合、それは人間の理性的な理解を越えているのではあるが。

三、愚者の沈黙

「ハルボクラテスの徴」についての研究において、シヤステルは、類似した形態と「徴」との混同に注意を促し、意味論による沈黙の画像の検討を行った。彼は、ルネサンス以前のメラニコリーの画像や、福音書記者における「座る人」(homo sedens)の「考える人」(penseros)のポーズが、「ハルボクラテスの徴」を明確にあらわしていないことを指摘して、両者を区別している¹¹¹。

しかしながら、シヤステルが主張するように、意味の継承とかたちの継承は一致しなければならぬのだろうか。類似した形態を探ることは、本論考の考察においてはむしろ有効であろう。《愚者》のように沈黙の仕種を示す愚者は、確かに典型的な愚者像とはいえず、筆者の知るかぎり、類例を指摘した研究はない。しかし実は、マイセス以前の愚者表現の中にも類似した画像は存在しているのである。

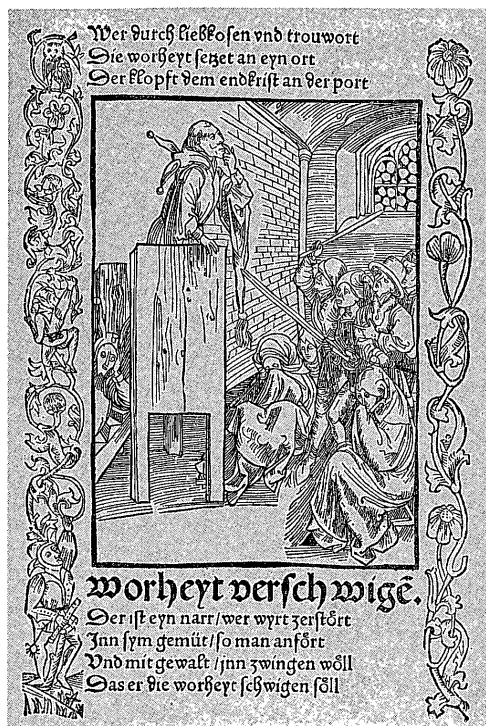


図5 《説教壇の愚者》木版画
 ブラント『阿呆船』初版より 1494年

一四九四年の謝肉祭にバーゼルで上梓されたゼバスチャン・ブラントの『阿呆船』は、愚者文学の嚆矢であるばかりでなく、それに付された版画挿絵によつても意義深い。すなわち、デューラーその他の手になる一一〇枚の木版画挿絵は、芸術的においても愚者図像においてもきわめて重要である。²³⁾

「真実を黙すること」(一一〇四)の《説教壇の愚者》では、群衆を前にした愚者は、左手の人指し指を口に置いている(図5)。この仕種は、表題からも、沈黙をあらわしているかと解するべきであろう。しかし、愚者を悪徳とするブランドが述べるのは、真理を隠す愚かしさである。そして、テクストで述べられているように愚か者の正体はすぐに暴かれる。さらに興味深いことに、挿絵において、愚者は沈黙の仕種を示しながらも、語り手として説教壇に立っているのである。沈黙の意味は異なるものの、沈黙しつづるといふ点において、この愚者とマセイスの愚者はきわめて類似しているといえよう。

さらに、『阿呆船』では別の作例も見いだされる。扉絵裏と「のらくら船」(一一〇八)の《阿呆船》(図6)では、²⁴⁾グリフ博士の旗を掲げる者の



図6 《阿呆船》木版画
 ブラント『阿呆船』初版より 1494年

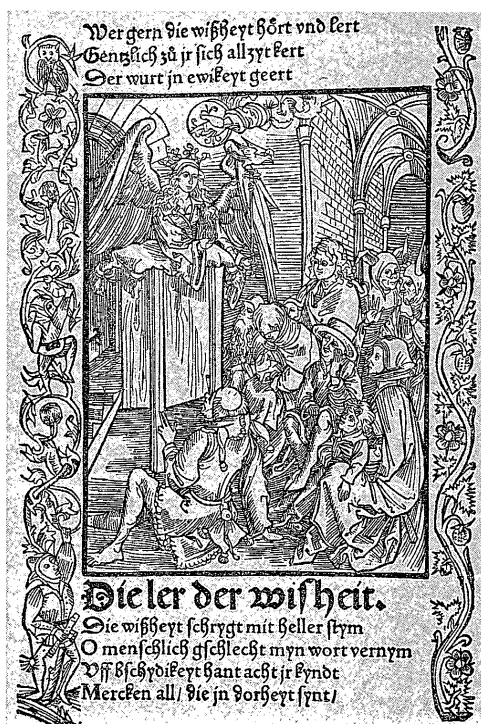


図7 《説教壇の賢慮》木版画
 ブラント『阿呆船』初版より 1494年

右手前の愚者が、「英知のすすめ」(一二二)と「賢者のこと」(一一二)の《説教壇の賢慮》(図7)では、²⁵⁾右端奥に立つ愚者が人指し指を口に置いている。この二人の愚者が場面においてどのような役割を演じているかははっきりせず、したがってこの仕種が沈黙をあらわしているかどうかは定かではない。とはいえ、これらの愚者の表現が単なる偶然的産物でない



図8 マイスター-E・S <m> 銅版画 1466年頃

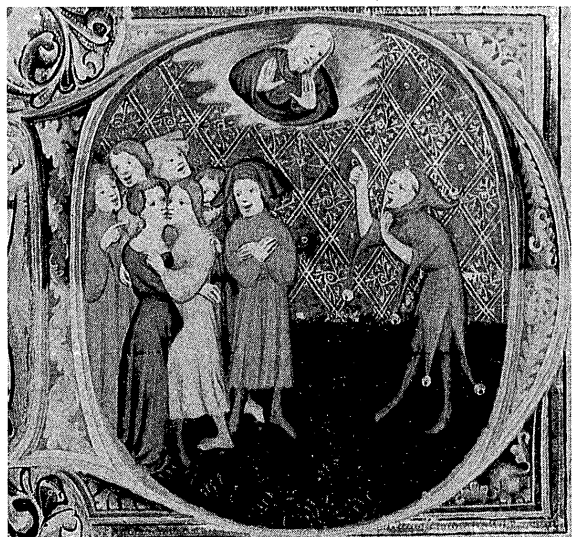


図9 イニシアル〈D〉「リチャード二世の大型聖書」より
1411年頃 ロンドン 大英図書館(Royal I.E.ix, fol.148)



図10 サン・ピエール大聖堂
共誦祈禱席彫刻 15世紀

と思われるのは、すでに筆者が別のところで詳しく論じたように、一四六六年頃のマイスターE・Sによる銅版画(図8)や一五世紀初めの写本画(図9)の中に、同じく人指し指を口に置く愚者が描かれているからである。銅版画や写本にみられる愚者の仕種は、沈黙をあらわしてはいないようだ。いずれの愚者も口を閉じてはいない。また、サン・ピエール大聖堂にある一五世紀の共誦祈禱席には、口を手当て、思いに沈んでいるかみえる愚者の姿が刻まれている(図10)。以上のような一五世紀の愚者の曖昧な仕種を考察する手掛かりとして、次に愚者と対置される美徳における沈黙の表現を参照することにした。

四、美徳の擬人像における沈黙

ランヘダイクは、沈黙の図像研究において、ハルボクラテスの沈黙を示す最初の作例として、フラ・アンジェリコによるサン・マルコ修道院の壁画《殉教聖人ベテロ》(図11)を挙げた。シャステルはこの作品を、ジョットがフィレンツェのサンタ・クロチエ聖堂の天井に描いた《忍耐》(図

12)をあらわす美徳の擬人像の系列に入れ、知的というよりは道徳的な忠告であるとして、「徴」と区別している。「修道院のエンブレムは、ヘルメス主義の特徴のなかには入らない」というのである。

美徳としての沈黙の仕種は、「忍耐」の擬人像のみにみられるのではない。シャステルは触れていないものの、四枢要徳の一つである「節制」の擬人像にもこの仕種があらわされることがある。

ジョヴァンニ・ピザノは、一三二一年に亡くなった神聖ローマ帝国皇妃マルゲリータのために墓碑を制作した(一三二三年までに完成)。一八世紀の公用徴収のため散逸した墓碑彫刻は一部現存するのみである。かつては石棺を支えるキャリアティドの四枢要徳の擬人像の一つであったと考えられる頭部断片には、唇の上に失われた指の痕跡がある(図13)この像のともとの姿は、ピザノの追隨者によっておそらくこの作品に基づき制作された、ジェノヴァのサンタ・マリア・マッダレーナ聖堂の壺を持つ《節制》の擬人像(一四世紀後半)によって想像される(図14)。指を唇にあてる仕種をはっきりと示すこの像も、やはり本来は墓碑を構成してい



図11 フラ・アンジェリコ《殉教聖人ペテロ》壁画 フィレンツェ サン・マルコ修道院 1438-52年

図14 ピザーノ派《節制》大理石 ジェノヴァ サンタ・マリア・マッダレーナ聖堂 14世紀後半



図12 ジョット《忍耐》壁画
フィレンツェ サンタ・クローチェ聖堂 1317年以降

図13 ジョヴァンニ・ピザーノ《節制》
大理石 スイス個人コレクション 1313年以前

たと推察されている。

ジョットによるスクロヴェーニ礼拝堂壁画(図15)や後の一六世紀のブリューゲルの下絵による銅版画(図16)のように、弁舌の慎みをあらわす「節制の美德」の擬人像は、『ヤコブの手紙』の「馬を制するには、口にくつわをはめれば、その体全体を意のままに動かすことができます」(三・三)から、舌の抑制を轡であらわすのが常である。しかし、轡を口にはめるといふ強烈な表現を避け、そのかわりに指を唇に置き、沈黙の仕種があらわされたと考えられている。

五、舌の罪

舌を慎しむのが美德のアトリビュートとなるのは、舌が罪深いからである。舌の罪については聖書に多くの記述があるが、たとえば、『ヤコブの手紙』に、「舌は火です。舌は『不義の世界』です」(三・六)「舌を制御する人は一人もいません。舌は疲れをしらない悪で死をもたらす毒にみちています」(三・八)とある。この罪を背負った者こそ、愚者であるといえよう。愚者の多弁は、そのもつとも本質的な特徴である。

マイケル・カミールは、その刺激に満ちた著作『周縁のイメージ』において、ゴシックのマジナルな表現にみられるロマネスクの伝統を述べるなかで、ウェルズ大聖堂(一二二〇頃)の「歯痛の男」として知られる柱頭彫刻をとりあげている(図17)。彼は、男の左人指し指を口の端に置く仕種が、ロマネスク彫刻における悪魔的な表象のひとつである「しかめ面」(grimace)―片手ないし両手の人指し指で口角を引っ張った醜い顔―の變形でありながら、さまざまな罪の場である口に注意を促すことで、この男は卑しい人間の痛みのエンブレムとなっていると述べている。この男の仕種は、本論考で問題としている愚者の仕種にきわめて類似している。この点で、カミールが仕種にかんして口(舌)の罪に言及しているということに興味深い。すなわち、この仕種は罪の暗示とみることができるのである。「しかめ面」は、一五、一六世紀の「キリスト受難伝」においてよくみ



図16 ピーテル・ブリューゲル画《節制》銅版画 1560年



図15 ジョット《節制》壁画
パドヴァ スクロヴェーニ礼拝堂 1305年

られる嘲りの仕種である(図18)。「しかめ面」と同時に舌を突き出す場合もあるが、「舌を突き出す」「指を口に入れる」もまた嘲りの仕種として知られている。猥雑で卑俗な仕種は、キリストを嘲弄する罪深い者どもの醜悪さを強調する手段として用いられた。⁸³そして嘲弄する者の中には、しばしば宮廷道化の愚者の姿が描かれ、こうした嘲りの仕種を示すのである。⁸⁴つまり、舌の罪を暗示する仕種は、嘲りの仕種に重なり、同時に愚者に関連深いものだったのである。

おわりに

マセイスの《愚者》を始まりとし、その多義的な意味を確認すると同時に、指を口に置くという類似した形態の系譜を広く探ってきた。無意味な多弁によって特徴づけられる愚者は、舌の罪と深く結びつくと考えられる。本稿での意図は、沈黙の仕種を「しかめ面」などの特徴的な嘲りの仕種と安易に混同することではない。そうではなく、美德と対置される、罪を暗示する口にかかわる仕種が、愚者に典型的なものとして存在していたことを示すことにあった。一五世紀の愚者の示す曖昧な仕種は、同様にこの罪



図17 ウェルズ大聖堂 柱頭彫刻 1220年頃

を暗示すると考えることができるだろう。マセイスの《愚者》は、エラスムスの思想に影響を受けているとはいえ、おそらく愚者はすぐさま賢者のふりを装ったのではない。形態の上でも、一五世紀の悪徳としての愚者の伝統を引いているのである。マセイスの作品を見た当時の人々は、愚者の罪なる愚かしさをあらわす仕種を同時に思い浮かべたことだろう。このことは、《愚者》の複雑で重層的な意味を理解する有効な手掛かりとなると思われるのである。

〔註〕

(1) SILVER, L.: *The Paintings of Quirin Massys with Catalogue Raisonné*, Oxford, 1984, pp. 134-160.

(2) 沈黙の図像にかんしては、とくにLANGEDIJK, K.: *Silentium*, in: *Nederlandsch Kunsthistorisch Jaarboek*, 15(1964), pp. 3-18; WAD-DINGTON, R. B.: *Iconography of Silence and Chapman's Hercules*, in: *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, 33(1970), pp. 248-263;



図18 《キリストの嘲弄》『時禱書』より
ネーデルラント 1410-20年
ロンドン 大英図書館
(MS. Add. 50005, fol. 102v.)

CHASTEL, A.: Signum harpocraticum, in: *Studi in onore di Giulio Carlo Argan*, Roma, 1984, vol. 1, pp. 147-153 の研究を参照した。

(3) ヲヤヤス《愚者》のイコソト文庫。Flemish Painting, exh. cat., Worcester-Philadelphia, 1939, p.35, no. 45; *Holbein and His contemporaries*, exh. cat., Indianapolis, 1950, no. 50; TIEFZ-CONRAT, E.: *Dwarfs and jesters in Art*, London, 1957, p. 94, no. 21(頁上未頁); WILLFORD, W.: *The Fool and His Septre*, London, 1969, p.6 (W・ハー

ルノード『道化と杖』高山宏訳 晶文社 一九八六年 六三頁 図一); DE BOSQUE, A.: *Quentin Metsys*, Bruxelles, 1975, p. 196, fig. 242; SILVER, op. cit., pp. 146-148, cat. 44; GAIGNEBET, C.-LAJOUX, J. D.: *Art profane et religion populaire au moyen age*, Paris, 1985, p. 189; MICHAEL, E.: *The Drawings by Hans Holbein the Younger for Erasmus' "Praise of Folly"*, Ph. D. Washington Univ., 1986, p. 216, fig. 42; MEZGER, W.: *Narrenidee und Fastnachtstrauch. Studien zum Fortleben des Mittelalters in der europäischen Festkultur*, Konstanz, 1991, p. 295, fig. 164; MELLINKOFF, R.: *Outcasts: Signs of Otherness in Northern European Art of the Late Middle Ages*, 2 vols., Oxford, 1983, vol. 1 p. 170, vol. 2 fig. VIII. 29.

(4) 銘文上方の "Mot" は後の補筆である。

(5) 愚者の外見的特徴を「ムンク」ムンクとして、MICHAEL, op. cit., pp. 197-238; MEZGER, op. cit., pp. 183-308 を参照。

(6) 『回船』の「無駄聖みのムンク」(二十六)や「ムンク・ホルバインが『痴愚神札』初版の欄外に描いた素描挿絵 (Drawing no.4) に「ムンク王がみられぬ」。

(7) うばやあはは通常邪悪なものの徴であるが、『ルネ・ダンジュの祈禱書』の聖母像 (Paris, BN, MS. lat. 17332, fol. 15v.) のうばは否定的な意味を全く持つようである。MELLINKOFF, op. cit., pp. 168-169 参照。

(8) SILVER, op. cit., p. 228.

(9) Ibid., p. 148.

(10) 「賢く愚者」のイコソト KAISER, W.: *Wisdom of the Fool*, in: *Dictionary of the History of Ideas. Studies of Selected Pivotal Ideas*, Vol. 4, 1973, pp. 515-520 (W・カイザー「愚者の知恵」高山宏訳『西洋思想大事典』第一巻 平凡社 一九九〇年 六二八-六三四頁) を参照。

(11) この作品を扱ったヤン・スハルタのキロン像が三年後に制作された。その銘文が「哲学者メンルタのキロン」「汝自身を知れ」(Chilon Philosophus Spartanus/Nose teipsum) である。Strauss, W.J. ed.: *The Illustrated Bartsch*, New York, 1980, vol. 4, no.12, 13; LANGEDIJK, op. cit., p. 14.

(12) ヤン・タフネット神父(一五四六-一六一三年)は、別名マナーズ・イナイナヤと称し、多くの著作を残した。ヤン・タフネット神父については、森洋子『プリノーゲル』の「多々の著作を残した。ヤン・タフネット神父については、森洋子『プリノーゲルの謎の世界 民衆文化を語る』白風社 一九九二年 三三-三四頁を参照。

(13) Cum tacet, haud quicquam differt sapientibus amens; Stulticiae est index linguage, voxque suae. Ergo prenat labias digitoque silentia signet. Et sese Pharium vertat in Harpocratem. ハルチャーニの「沈黙」のイコソト DE ANGELIS, M.A.: *Gli emblemi di Andrea Alciati nella edizione Steyner del 1531. Fonti e simbologie*, Salerno, 1984, pp. 60-63; 拙論『沈黙』の図像のイコソト『東京芸術大学所蔵エンブレム本』に関する美術史的研究』科研報告書(〇二四一〇〇二) 一九九三年 一一九-一二七頁を参照。

(14) 一六世紀末までの「エンブレマータ」諸版に付された「沈黙にうつて」の画像挿図は、五人の画家によるものが知られている。そのすべての図は、前掲拙論で示した。

(15) CHASTEL, op. cit., p. 152, n. 4 参照。ハルボクラテスについての古代文献としては、まずプルタルコス『倫理論集』の「イシスとオシリスについて」(六八)がある。「ハルボクラテスは、不完全な子供の神としても、豆を守る神としてもなく、人間の裡にある、未熟で不完全で漠然とした、神々についての議論を是正するものであり、主たる神と見做される。それゆえ、彼は言葉の慎みと沈黙の徴として唇の上の指を置く。メゾレの月に、彼らは彼に豆を捧げ、次のように言っ。

- 「舌は幸いである。舌は神である。」彼らによれば、エジプトの植物の中で、とりわけ桃が神に捧げるにふさわしい。なぜならその実には心臓に似て、その葉は、舌に似るからである。 De Iside et Osiride, 68, in: *Pulkarch's Moralia* V, tr.
- BABBITT, F. C., Cambridge Mass.-London, 1927, p.159. 英訳からの和訳。下線筆者。ハルポクラテスは、未熟で生まれたため下肢が弱いとされる。 Ibid., p. 49 参照。ルネサンスのハルポクラテス像は桃を手に持つ。
- (16) LANGEDIJK, op. cit.
- (17) SILVER, op. cit., p.228.
- (18) ウルガータ聖書のラテン語テキスト (Stultus, si tacuerit, sapiens reputabitur; et si compresserit labia sua, intelligens.) は、エビグラム第一および第三行に反映している。
- (19) CHASTEL, op. cit.
- (20) ウイルフォード、前掲書、六一一―六一三頁。
- (21) CHASTEL, op. cit., pp. 148-149.
- (22) WINKLER, F.: *Dürer und die Illustration zum Narrenschiff. Die Basler und Straburger Arbeiten des Künstlers und der altsächsische Holzschnitt*, Berlin, 1961. セバスティアン・ブランド「阿呆船」上、尾崎盛景訳、現代思潮社、一九六八年。
- (23) ブランド、前掲書下、一九九―二〇四頁。
- (24) 前掲書下、二一八―二二六頁。
- (25) 前掲書上、八七―八八頁、下、二五―二五九頁。《説教壇の愚者》および《説教壇の賢慮》はデューラーに帰されるが、《阿呆船》はおそらくハインツ・ナル・マイスターによる。BRANT, S.: *Das Narrenschiff. Nach der Erstausgabe (Basel 1494) mit den Zusätzen der Ausgaben von 1495 und 1499 sowie den Holzschnitten der deutschen Originalausgaben*, hg. Lemmer, M., Tübingen, 1968 (未見); MEZGER, op. cit., p. 551, Anm. 21 参照。
- (26) 拙論「マイスター・E・Sの《形象アルファベット》の愚者について―一五世紀における版画芸術と写本芸術との関連―」『美術史』第一三四冊、一九九三年、二三

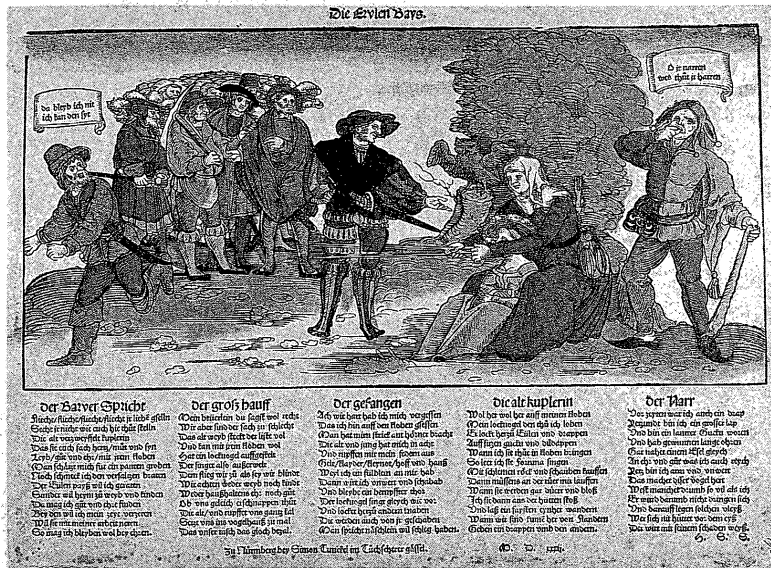


図19《鼻の震》木版画 ドイツ 16世紀

- 二二四八頁。
- (27) GAIGNEBERT-LAJOUX, op. cit., p. 180 図版解説には「その仕種により、この愚者は沈黙とヒタコラス的瞑想を導く」とあるが、この仕種は、後述する「指を口に入れる」に近いように思われる。
- (28) LANGEDIJK, op. cit., p. 6-7.
- (29) CHASTEL, op. cit., p. 150. クレイトン・ギルバートは、フラ・アンジェリコの印象的な聖人像について、「ドミニコ会修練士のための規律を記した一五世紀の手引き書から、指を唇に置くのは、話すことを含む合図であることを指摘し、沈黙の勧告とする従来の解釈とは逆の説を唱えている。もしこの解釈が正しいとすれば、シヤステルの見解とは反対に、この仕種はむしろ沈黙を解き放つものであるという

らうとする。GILBERT, C.: A Sign about Signing in a Fresco by Fra

Angelico, in: *Tribute to Lotte von Brand Philip*, New York, 1985, pp.

65-70 (未見); HOOD, W.: *Fra Angelico at San Marco*, New Haven-

London, 1993, p. 314, n. 4 を参照。

68 SEIDEL, M.: Ein entdecktes Fragment des Genueser Grabmals der

Königin Margarethe von Giovanni Pisano, in: *Pantheon*, 13(1968), pp.

335-351; Idem ed., *Giovanni Pisano a Genova*, exh. cat. Genova, 1987,

cat. 3, p. 75.

69 SEIDEL, Ein entdecktes Fragment, pp. 343-344. 節制のなさを図像

によって、森洋子「ルーテル・ブリューゲルの『節制』のイコンマナミーに

つづ(1)』『美術史』第八二冊、一九七一年、六五—八〇頁。「同(二)」『美術史』

第八三冊、一九七一年、一〇五—一〇六頁参照。

69 CAMILLE, M.: *Image on the Edge. The Margin of Medieval Art*,

London, 1992, p. 82, fig. 41.

69 メリノコフによれば、卑俗な仕種は、性的ないしスカトロジックな暗示により、

侮蔑の表現となる。「舌を突き出す」「指を口に入れる」はいずれも性的な暗示をあ

らわす。MELLINKOFF, op. cit., pp. 195-208. 一六世紀の一枚刷り木版画

《鼻の翼》では、宮廷道化の愚者の「指で口角を引っ張り舌を出す仕種は、その本

来の意味で用いられている(図19)。「宗教改革時代のドイツ木版画」展覧会カタロ

グ、国立西洋美術館、一九九五年、五三番。銘文の拙訳を参照。

64 MEZGER, op. cit., p. 81-92.

(図版出典)

1. SILVER, L.: *The Paintings of Quentin Massys with Catalogue*

Raisonné, Oxford, 1984; 2. Strauss, W. J. ed.: *The Illustrated*

Bartsch vol. 4, New York, 1980; 3. 東京芸術大学附属図書館; 4. 東

京、中世ヨーロッパ博物館; 5, 7. WINKLER, F.: *Dürer und die*

Basler und Straßburger Arbeiten des Künstlers und der altdutsche

Holzschnit, Berlin, 1951; 6, 18. MELLINKOFF, R.: *Outcasts: Signs*

of Otherness in Northern European Art of the Late Middle Ages

vol. 2, Oxford, 1993; 8. München, Staatliche Graphische Sammlung;

9. London, British Library; 10. GAIGNEBRT, C.-LAJOUX, J. D.: *Art profane et religion populaire au moyen âge*, Paris, 1985; 11.

HOOD, W.: *Fra Angelico at San Marco*, New Haven-London, 1993;

12. PREVITALI, G.: *GiOTTO e la sua bottega*, Milano, 1974(1964);

13, 14. SEIDEL, M. ed.: *Giovanni Pisano a Genova*, exh. cat. Genova,

1987; 15. SEMENZATO, C.: *GiOTTO. Cappella degli Scrovegni*,

Milano, 1983; 16. KLEIN, H. A.: *Graphic Worlds of Peter Bruegel*

the Elder, New York, 1963; 17. CAMILLE, M.: *Image on the Edge.*

The Margin of Medieval Art, London, 1992; 19. 『宗教改革時代の

ドイツ木版画』展覧会カタログ、国立西洋美術館、一九九五年。

(平成7年10月20日受理)